

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

廣田郷士

【所属】(助成決定時)

東京大学大学院総合文化研究科博士課程

【研究題目】

脱植民地期におけるアンティュー諸島フランス語詩の誕生と展開

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、カリブ海に浮かぶフランス海外県・アンティュー諸島におけるフランス語詩の誕生と生成の過程を、1930年代から60年代にかけての世界的な脱植民地化の時代に焦点を当てて解き明かすものである。本研究では、同地域の文学史・地域史的なパースペクティブを採用しつつ、エメ・セゼールとエドゥアル・グリッサンという二人のフランス語詩人を中心に、二人の詩人における土地の時空間的表象の連続した展開過程に着目する。すなわち、屹立する自己意識と自由のメタファーとして垂直的風景と、関係性と他者意識の展開としての水平的風景である。これらの詩的表象をアンティュー諸島の脱植民地化という同時代の政治的文脈と結びつけることで、詩的言語による集団の創出という、カリブ海フランス語作家たちの文学的かつ政治的な使命を明らかにすることが、本研究の最終的な目的である。

【研究の内容・方法】(800字程度)

複数年にまたがる研究課題であることを考慮し、本年度の研究はまず第一に、空間をめぐる理論的考察の分析と整理にあたった。その上で、特に社会科学の分野を中心として、近年風景と空間をめぐる美的(文学的)知覚の変遷をめぐる理論の発展が近年目ままいことに着目し、「空間論的展開」とも呼ばれる理論的成果をの整理を試みた。

その過程で新たに着想されたのが、空間表象と文学ジャンルの関係性である。セゼールの詩が構築してきた主体の発露としての垂直的風景が叙情詩としてのジャンルと関連付けられ、またグリッサンの描く「関係性」への「開き」としての水平的風景が叙事詩というジャンルに訴えたという点は、文学と集団の創設の関係性を紐解く上では無視することのできない問題である。そのためフランス語文学史における二人の詩人のより正確な位置づけと影響関係をもう一度捉え直す必要に迫られた。特に19世紀前半のロマン主義文学とセゼール作品の関係、また現象学を経て以降のフランス現代詩の展開とグリッサンの詩の特性といった形で、より文学史的観点に立った分析を始めた。

本研究の遂行上不可欠となるのが、アンティュー諸島(マルチニック島、グアドループ島、マリー・ガラン島)での現地調査とアーカイブ調査である。貴財団よりの研究助成のよってその調査渡航が実現したこと、まずは感謝の念を記しておきたい。二週間に渡る今回の現地調査によって、40年代のグリッサンを良く知るインフォーマントとのインタビュー、セゼールの文化政策の協力者や現地在住の多数の作家らとの面会や具体的な証言の収集という点では、極めて大きな成果が得られた。また戦時期以降の現地刊行雑誌や作品の調査・閲覧、そして20世紀前半の地域史の資料の調査・閲覧によって、日本・フランス国内では得られない文献学的知見を得られたことは、今後の研究の進展に計り知れない貢献をもたらすであろう。

【結論・考察】(400字程度)

詩における時空間表象とジャンルの関係性の問題に着目できたことは、本年度の研究の大きな成果であると言ってよい。それは、植民地文学の観点から、「正統」とされる文学ジャンルと文学史を問い直すことに繋がるからである。つまり、文学創作が、単に植民地の集団の存在主張であるだけでなく、その存在を否認してきた想像・創造のパラダイム自体の修正を迫る性質をも持つということである。この問題をより深く掘り下げるべく、空間と歴史をめぐる文学史的・思想史的観点からの作品分析が今後必要となることを痛感した。また現地調査の点で多大な成果があったが、反面2週間という短期の滞在であったため、極めて限られ

た範囲でしか行動・調査ができなかったことも事実である。特に詩における風景の主題の分析を継続するためにも、現地調査の継続的な遂行の必要性を再認識した。

文学とは、作家という極めて個人的な「才能」のみによるのではない。作家の想像力を産み出す土地と歴史とが及ぼす働きもまた決して無視することはできない。このことは、時空間を共有しない「他者」を排除することでは決してなく、逆に不透明な「他者」を受容する重要な土壌となるはずである。自己は自己であることなしに、他者との関係に目覚めることはできない。移動と離脱が常態化し、根無し草的な生が（消費社会の論理によって）称揚されがちなグローバル世界であるからこそ、〈土地〉は主体性を求める文学においてなお可能性を持ちつづけるだろう。本研究は少なからずこの点を明らかにできたものと考えている。